

1800年代の終りから、今世紀のはじめにかけて、現在行なわれている胃疾患に対する診断学の基礎はほぼ確立されたが、その際中心的な役割を演じたのがドイツ医学であったことは周知の事実であろう。

しかし、その後消化管ホルモンの抽出、合成または胃内視鏡機種の開発など消化管をめぐるトピックについては、西ドイツは米国、北欧諸国、日本等に多少遅れをとって来たと言わざるをえない。19世紀から20世紀の前半にかけての華やかさの故に、その断層を一層強く感じるのである。とくに胃疾患の病態生理学的な診断法に関しては Nöller が、ラジオ・カプセルで胃内 pH のテレメータリングを実用化した以外みべきものがなかったのである。

しかし、最近ではドイツでも胃疾患について、ことに Erlangen 大学を中心に数多くのシンポジウムがもたれ、また基礎データを積み上げて一つの体系を作る研究方法を得意とする気質を反映して、消化器病学の分野でも優れた Lehrbuch, Handbuch が出版されるようになり、再びその研究が盛んになって来た。

ここに紹介する本もそういった気運の一つのあらわれとみられるもので、著者は西独・Würzburg 大学内科の Oberarzt で、中堅として活躍している人であるが、96頁の小冊子で、書名の「Erweiterte Verfahren der Magenfunktionsdiagnostik」とあるように胃液分泌検査の新らしい方法について豊富な図と表を使って書いている。

内容は大きく2部に分かれている。第1は胃液分泌についての生理および病態生理学的な意義についての概説で、特に胃粘膜からの蛋白質の分泌あるいは喪失について詳しく

□書 評□

Gastroenterologie und Stoffwechsel Bd. 4

Erweiterte Verfahren der Magenfunktionsdiagnostik

Lucius Maiwald 著

京都府立医科大学公衆衛生学教室

川 井 啓 市

述べている。第2の部分は著者の実験成績であるが、できるだけ生理的状态での胃分泌の把握ということを基礎に、またテレメーターを使った胃内 pH の変化を基礎状態、1%カゼイン溶液、1%カフェイン溶液、牛乳を試験薬とした場合、ヒスタログを刺激剤とした場合について述べており、一部に自律神経失調症の患者の反応パターンなど興味のある所見が述べられている。

他方、胃内での蛋白分解については、著者の考案した内腔の二重になった胃ゾンデを用い、先端につけたラジオ・カプセルで pH をテレメータリングで連続測定し、体外にはポンプをつけて胃液を一方のチューブから吸引して、他方を通して胃内に戻す仕組になっており、その循環の途中で Buret 反応、Folin による蛋白量、トリプトファン、チロジン量を自動的に測定している。カゼイン溶液を試験食とすると遊離塩酸のある時は、トリプトファン、チロジンが速やかに検出されるが、遊離塩酸のない時にはそこまでは分解されないこと、またカフェイン溶液だけでも胃液中に蛋白質及びその分解産物が検出されるといっている。

また臨床的に28名の胃潰瘍患者をカーベノキソロンで4週間治療した

前後での胃内蛋白分解をヒスタログ刺激でみているが、治療後では Buret 反応、Folin 法での陽成物質が低下している等、常に消化器内科医として胃の病態生理をみていることがうかがわれる。

しかし、最もユニークな研究は、前述の実験をする時、同時に通常の肝機能検査に使う BSP を 5 mg/kg 静注し、その胃内出現を観察していることであろう。BSP は血中でのアルブミンと結合し、一方アルブミンは胃粘膜から胃液中に移動する点を利用したもので、注射後15分頃から約半数の被験者において胆汁の逆流がなくとも、BSP が胃液中に認められること、また排泄されたもののなかでは酸分泌の高いもので BSP 排泄量が低く、逆に酸分泌の低いものでは BSP 量は高いこと、更に刺激後よりも基礎状態で高頻度にみられることを指摘している。そして肝機能検査と同時に胃酸分泌、胃液中への蛋白質出現の程度を知る上で有用であることを強調している。

ただ惜しいことには臨床で各種疾患での成績は述べていない。確かに Ménétrier 病、蛋白漏出性胃腸症、スキルス、肝硬変症の患者に応用することに興味もたれるが、実際の臨床で応用するためには、胆汁の逆流、BSP 胃内排泄機構も含めての基礎検討が必要であろう。

以上がこの書の概要であるが、これから胃分泌の病態生理を学ぼうとしている人に対してというよりは、胃分泌の新しい意義を模索している人々には、特に実験の後半が示唆を与えると思われる。

(Georg Thieme Verlag, Stuttgart
頁96, 図55, ¥ 5,570, 1973,
医学書院洋書部取扱い)